Osaka University Knowledge Archive

Title	サンディアゴへの道
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1979, 5, p. 85-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97882
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

サンティアゴへの道

森　本　久　夫

1

和歌山県の山村を歩いていると，しばしば「いや」，「ゆや」などと呼ぶ部落に出くわす。それらはみな「熊野」から来たと言われる。古代多くの人が熊野詣でのためにそうした部落を通って通じていた道を辿っていったという。その人たち個人個人がただそこを通っただけだろうか。紀州弁と呼ばれる和歌山県の方言，厳密には紀北，中紀，紀南，あるいは山間部，海岸線と区別していかなければその実体はつかめないかも知れないが，それはとにかくとして，その方言の中にある多くの語彙が平安時代の言葉の形跡を残していると言われる。これは熊野詣での人たちが都からこの地にもたらし，残していったものだともきかされてきた。

私は三度にわたりレオンの地を旅し，ある期間そこに住んでみて，ここには今も同じことが存続していることに気づいた。二夏約1カ月ずつレオン市の安ホテルで暮らしたが，時々サンティアゴ巡礼団の一行にホテルの食堂を占領され，食事を待たされた。16世紀牧人に聖母が姿を見せられた処に道の聖母の聖堂 Santuario de la Virgen del Camino が建っており，多くの人が出かけていく。この人たちの辿る道こそ10世紀以来多くの人びとがガリシアのサンティアゴ・デ・コンポステーラへ巡礼の旅をつづけた道である。

その道は今は国道になって自動車が走るところもあれば，市街地の街路の一部であったり，パンプローナのように大学のキャンパス内を走っているところもある。またモリナセカのように昔のおもかげを残して田舎の石ころ道のままのところもある。

熊野路がどんな道だったのかと想いを馳せるようにサンティアゴへの道 Camino de Santiago, ruta jacobea に想いは駆けた。

2

ルカによる聖福音書第5章に次のような場面がある。

話がおわってから，シモンに「沖にのり出して，あみをおろして漁をしなさい」とおおせられたので，シモンは，「先生，私たちは夜中はたらいて何一つとれなかったのです。けれども，お言葉ですからあみをおろしてみましょう」と答えた。そしてその通りにすると，おびただしい魚がかかって，あみは破れそうになったので，ほかの舟にいた仲間に，助けに来てくれと合図した。かれらが来て，魚を二せきの舟にあげると，舟は沈みそうになるほどだった。

これを見たシモン・ペトロは，イエズスの足もとにひれふして，「主よ，私からはなれて下さい，私は罪人です！」といったが，それは，かれも，かれといっしょにいた人々も，その大漁におどろいたからだった。ゼベデオの子で，シモンの仲間だったヤコボとヨハネとてもおなじことだった。イエズスは，シモンに向って，「おそれることはない，あなたはこれからのち，人間を漁するであろう」とおおせられた。舟を岸につけたかれらは，すべてをおいてイエズスに従った。

ここに登場するシモンこそ使徒たちの中心となりキリスト教会の基礎となったペトロであり，ヤコボは大ヤコボ(ヤコブ) Santiago el Mayor，ヨハネはそのヤコボの弟で福音書を著わすことになる。

また使徒行録第12章は次の文章で始まっている。

そのころ，ヘロデ王は，教会内のある人々に手をかけて，責めさいなみ，ヨハネの兄弟ヤコボを剣で殺したが，それがユダヤ人たちの気に入ったと知ると，またもやペトロを捕えた。

これらのことから，私たちはガリラヤ地方のゼベデオという人の息子であったヤコブが漁師をしていたが仲間のシモンや弟のヨハネとともにキリストの弟子となり人間を漁するようになった。そして紀元44年ごろパレスチナでヘロデ・アグリッパ1世によって殺害され，使徒中，最初の殉教者となった事情を知ることができる。

3

大ヤコブがイベリア半島で伝道を行なったかどうか確かなことはわからない。7，8世紀ごろから彼が伝道を行なったと言われ出した。そのもっとも有名な例はベアト・デ・リエバナの「黙示録注釈」Comentarios al Apocalipsis （8世紀）である。ヴルガタ訳（ラテン語訳）聖書の翻訳者である4世紀の聖ヒエロニムスは聖ヤコブがイスパニアに行ったと推論しており，使徒目録 Catálogos Apostólicos は聖ヤコブの伝道地をイスパニアと指定している。しかし，この推論は7世紀のトレド大司教聖フリアン，セビーリヤ司教聖イシドロらが反論している。

その後，論争はつづき，中傷がくり返された。ついに16世紀末祈祷書の改訂にあたり教皇クレメンテ8世はピウス5世によって挿入されていた「聖ヤコブはイスパニアをめぐり，福音をのべ伝えた」という字句を削除させている。

それはともあれ，フランスのイスパニスタであるジャン・デスコラがその著「キリスト教イスパニアの歴史」の中で1139年ルイス・ロペスが書き残したものとして引用している次の一節[1]が語る橋脚（ピラール pilar ）の聖母[2]と結びついて聖ヤコブのイスパニア伝道は語られ，信じる人の心の中に定着していったようである。

（紀元）39年10月12日，ゼベデオの聖ヤコブは弟子たちとともにエブロ川の岸辺で祈っていた。夜は暗かった。聖ヤコブはみんなから人間の手が投げた石がとどく位の間隔に離れたとき，突然，目のくらむような光がさした。数多の天使たちに守られて神の母が姿を現わされた。彼女は斑入り大理石の橋脚に坐わっていた。福音書作者の聖ヨハネも彼女に従っていた。天上の声がハープの音をともなって天使祝詞を調子を合わせてとなえていた。聖母は聖ヤコブに向かって言われた。「ここで人びとが私に礼賛をささげてほしい。私のために教会を建てて下さい。そしてこの橋脚が世の終わりまでこの場所にとどまりますように。ここで私は奇蹟を行いましょう。」聖母マリアの命令にしたがい，聖ヤコブはただちに礼拝堂を建てたが，これがのちのヌエストラ・セニョーラ・デル・ピラール教会である。

4

伝説によると813年ペラヒオという修道士がサン・フィス・デ・ソロビオという所でいつもミサを挙げていたが，何回となくリブレドン山の西のすそ野で，一本の高い樫の木を輝らす星をみた。同時に天使の歌声をきいた。彼はこの出来事をこの地を教区とするイリア・フラビア[3]の司教テオドミロに告げたところ，司教は翌日自分の目でそれを確かめに出かけた。7月25日のことであった。修道士が言ったその同じ場所で茂みを切りひらいたところ，祭壇がみつかり，その下に聖ヤコブとその2人の弟子アタナシオとテオドロたちの墓があった。

司教はそのことを王アルフォンソ2世に告げたところ，王はその墓の上に石と泥で小さな教会を建立させた。そして教会にその周囲3ミーリャ[4]の地を与えた。そしてそこに多くの修道院が建てられた。

アルフォンソ3世は石としっくい，大理石の柱と基礎の教会に改築させた。874年アルフォンソ3世はその后ヒメナとこの新しい教会に黄金の十字架を贈った。

ノルマン人によってイリア，フラビアが破壊されたため，聖ヤコブの遺骸は現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラに移された。1075年カスティーリャ王アルフォンソ6世とその王女ウラカはオビエドのカテドラルの聖ひつを寄付し，聖人の遺骸を保存させた。同年サンティアゴのカテドラルの建造が開始され，その周辺に都市が発展していった。

1589年イギリスのノリス将軍指揮のフランシス・ドレイクの艦隊がラ・コルーニャに上陸したため，大司教フワン・サンクレメンテは聖人の遺骸を秘匿した。[5] そのためその後1879年までその所在がわからなかったが，同年1月28日に見つかった遺骸について，1884年11月11日付回勅 Deus Omnipotens において教皇レオ13世は聖人のものであることを確認した。

5

聖ヤコブの墓への巡礼はアルフォンソ3世時代からすでにイベリア半島外からも行われるようになった。

記録に残る最初の外国人の巡礼者はピュイ・アン・ヴレの司教ゴテスカ

ルコである。950年彼は多くの人を連れてリオハのアルベルダ修道院を通過したとき，そこで写本を行なわせたが，写本に従事した人が彼の旅のことを誌した。しかし，だからといってゴテスカルコが最初の訪問者とはいえない。なぜなら彼についての記録は偶然の産物であり，彼以前の人についての情報が私たちの手許にとどかなかっただけかも知れないからである。

その後10年ほどして，モンセラーの修道院長セサーレオはフランスのナルボンヌに対してタラゴナ大司教座としての権利を回復するためにサンティアゴ大司教座の名声を利用した。その試みは失敗に終わったが，その姿勢はサンティアゴの価値をよく示している。

またアルメニア人の聖シメオンが来訪したこと，ノルマンの海賊たちはキリスト教徒にも回教徒にも恐れられたが，ガリシアのことを「ヤコブの地」を意味する Jakobsland として知っていたという事実は，この地が巡礼地として早くから有名になったことを示している。

巡礼者の波は12世紀から15世紀にかけて増加していった。

宗教裁判所では罪のつぐないにサンティアゴへの巡礼をすすめた。スラブ諸国では3回巡礼した者は税を免じられたし，教皇はサンティアゴへの巡礼者に特別の罪のゆるしを与えた。

信仰から巡礼する人，身体の病いの治癒を求めて旅する人，イベリアの見聞に巡礼を利用する人もいた。

巡礼路は，フランス街道 camino francês がその中心となったが，フランス領内には4コースがあり，一つはアルル，モンペリエ，トゥールーズ，ソンポールからカンフラン峡谷を通ってハカに到るものであり，ル・ピュイを発するもの，ヴェズレイを発するもの，パリを発しツール，ボルドーを通過するものの3コースはサン・ジャン・ピエ・ドゥ・ポール近くで合流し，ロンセスバーリェスを通過してパンプローナに到る。ハカから来たコースとはプエンテ・ラ・レイナで合流，その後，エステーリャ，ロス・アルコス，ログローニョ，ナヘラ，サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ，ベロラード，ブルゴス，ビリャルビーリャ，オルミーリョス・デ・ササモン・カストロヘリス，フロミスタ，カリオン・デ・ロス・コンデス，サーグン，マンシーリャ・デ・ラス・ムラス，レオン，アストルガ，ポンフェラーダ，ビリャフランカ・デル・ビエルソ，サリア，プエルトマリン，メリッド，アルスアを通過してサンティアゴ・デ・コンポステーラに到着

する。イスパニア領内だけで740キロ近い行程である。クリューニのベネディクト派修道士たちはキリスト教世界の象徴としてサンティアゴを評価し，この沿道に多くの修道院・施療院を建てた。施療院では階級，国籍を問わず，すべての巡礼者の診療にあたった。法によって旅人に最大の親切を示さなかったものは罰せられた。

イタリアからの巡礼者はプロヴァンスでフランスに入ったし，ドイツ，デンマーク，スエーデン，ネーデルラントの巡礼者はカンタブリア海岸の港に上陸，レオンでフランスからの巡礼路に入った。イングランドやスコットランドの人びとはノヤまたはラ・コルーニャで上陸した。ポルトガル人は海路の場合はパドロン[6]から入り，陸路の場合はブラガンサからプエブラ・サナブリア，オレンセ，セアを通ってサンティアゴ・デ・コンポステーラに入った。

これらのことからも解るようにフランス街道だけがサンティアゴへの道の唯一のものだったのではない。キリスト教徒たちが回教徒の領土を再征服していく何百年もの期間，半島北部のキリスト教諸王国は政治的にも軍事的にもいろんな状況を呈したが，それが巡礼者の辿る道に当然影響を与えたにちがいない。そしてそれらが要因となってフランス街道以外の道を巡礼者にとらせることにもなった。一例としてカンタブリア海岸に沿って行く道がある。そこは時にはけわしく，時には河川によって中断されて地形的にはふさわしくなかったが，それだけに安全だったため，多くの人がえらんだという。他方，先にも挙げたようにイギリスから来る人びとは船で直接ガリシアへ来ることが多かったが，1147年の第2次十字軍のように団体でおしかけ，アストゥリアスやポルトガルの港に上陸する人もいた。また地中海から来る人でカタルーニャやバレンシアで上陸する人もいたという。

一番ゆっくりと巡礼の旅をつづける人は徒歩で道を辿ったし，一番速い人は馬に乗って旅した。

1120年最初のコンポステーラ聖年 Año Santo Compostelano が定められてから，この年の巡礼は特別の罪のゆるしが教皇から与えられるため，5年毎のこの「ゆるしの年」años de perdonanza は巡礼者でごったがえしたという。

サンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルの聖ヤコブの像のよう

に，聖人は白馬にまたがり，赤い十字架の旗をささげ，剣をふりかざす。この姿にみられるように，早くから聖ヤコブの名は国土回復戦争 Reconquista と結びついていた。回教徒との戦いで彼の名は勝利の象徴として想起された。“¡ Santiago, y cierra, España ！”（突撃）[7] はモーロ人と戦うすべての人の異口同音に発する表現となった。勝利は彼のおかげであるとされ，王たちは戦いに勝利を得ると彼の墓に巡礼し，感謝をささげた。このようにして聖ヤコブはイスパニアの国土回復運動の歴史とかかわりをもっていった。伝説は増幅し，14世紀中葉には人びとは戦う前に聖ヤコブの許へ馳せ参じた。

16世紀になって国土回復運動は終了し，カトリック両王のもとにイスパニアが宗教的・政治的統一を達成してしまうと，外国からのサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼は減少する。また同世紀末から17世紀にはプロテスタンティズムのためにさらに減少した。18世紀にも減少しつづけ，19世紀にはついに国際性を失くした。

なお1590年フェリペ２世は他人の親切を悪用したり，宿や道路での盗賊行為，プロテスタントの浸透を恐れ，巡礼姿でのサンティアゴ行きを禁じている。

現在，情報観光省に設けられている聖年委員会では複雑な巡礼者の辿った通路の再評価を目指しているとのことである。

6

サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼が盛んになった12世紀はイベリア半島で多くの騎士団 órdenes militares が誕生した時代である。それらの騎士団は修道会として設立されたので，貞潔の誓い，制服，上長に対する服従の誓い，共同生活などが規定された。しかし騎士団だけに戦闘的性格が強かった。また団員全員が独身である訳ではなかった。

イスパニアではとくに戦闘的要請があって1158年カラトラバ騎士団，1160年または1170年サンティアゴ騎士団，1166年サン・フリアン・デ・ペレイロ騎士団（アルフォンソ９世によってアルカンタラの地を与えられたためアルカンタラ騎士団と改名）がつぎつぎに誕生した。そして３団とも教皇の認可を得たが，貞潔の誓いは自由で，団内には誓願修道士もおれば在俗

の人もいた。聖職者は修道院または騎士団の施設内で共同生活をした。各団は maestre と呼ばれる騎士団長によって統率された。騎士団長は騎士たち自身によって選出され，教皇から高位聖職者 prelado として認められた者である。アルフォンソ７世時代（1104—1157），イエルサレムの聖ヨハネ騎士団のような外国で設立された騎士団がイスパニアに導入された。

騎士たちは王の要請があると騎士団長ともども参戦した。

各騎士は１人または数人の徒歩の部下 escudero を連れていた。

次に聖ヤコブとその墓への巡礼に関係の深いサンティアゴ騎士団 Orden de Santiago について見てみたい。設立されたのは1160年か1170年か定かでない。レオンの騎士ペドロ・フェルナンデスによって設立された。自分たちの過去の生活を悔い改めた12人の騎士がエストレマドゥーラを回教徒の攻撃から守ろうとして集まったことに起源を発するとされる。そのように回教徒と闘うと同時に全ヨーロッパからサンティアゴ・デ・コンポステーラへ巡礼の旅をしてくる人びとを守ることを目的とした。その点は他の騎士団と性格を異にし，騎士団（軍団）であると同時に慈善団体であったといえよう。1170年征服したばかりのカセレスをフェルナンド２世によって与えられ，そこに落着いたため最初“frates de Cáceres”という名称を採用した。1171年サンティアゴ・デ・コンポステーラの大司教と講社協定を結び，ある地域のサンティアゴ祈願からあがる収益の半分を与えられ，またサンティアゴ・デ・コンポステーラの大司教がこの騎士団の一員と見做されるようになったためOrden de Santiago という名称をうけた。1174年アルフォンソ７世はクエンカのウクレスの町を彼らに与えたので，彼らはそこに本部をおいた。そして騎士団の領地はシウダー・レアル，クエンカ，トレドにわたって拡がった。1175年教皇アレクサンデル３世によって認可された。その後王たちから大いに特権を与えられ，また騎士団が直属していた教皇庁からバックアップされていたため司教の管轄外にあった。ラ・マンチャの地で勢力を伸ばしたこの騎士団は当然の結果としてカラトラバ騎士団と競うことになった。

ウクレスの本部がこの騎士団の本部とされながら，フェルナンド２世（1157—1188），アルフォンソ９世（1188—1230）の治世にレオンのサン・マルコスの修道院はカスティーリャのウクレス本部同様の重要性をもつ

ようになった。しかし中世全般にわたってみた場合には両者は競ったけれど，カスティーリャの方の優勢におわった。

このサンティアゴ騎士団は他の騎士団同様，１人の騎士団長 maestre と総指揮者 comendador mayor に統率されていた。その他それぞれウクレスに１人，レオンに１人の院長 prior がいて，さらに13人の指揮者 comendador がいた。これらの人びとは騎士団長のための審議会を構成した。

指揮者たちは国土回復戦争において大いに活躍した。シウダー・レアルの丘でアルフォンソ８世の軍隊がアルマンソールに敗れた1195年のアラルコスの戦いではサンチョ・フェルナンデス・デ・レムスが，カスティーリャ・アラゴン・ナバラの連合軍がアルモアーデス軍を破った1212年のラス・ナバス・デ・トロサの戦いではペドロ・アリアスが活躍したが，彼らはサンティアゴ騎士団の指揮者たちであった。

しかし，こうした騎士たちがとくに活躍したのはアンダルシアでの戦いにおいてであった。彼らは1232年トゥルヒーリョを占領した。モンティエル，メデリン，ウベダ，コルドバ，セビーリャの征服に参加した。フェルナンド３世をしてセビーリャの包囲を決意させたのは騎士団長ペラーヨ・ペレス・デ・コレアであった。これらの褒賞として彼らにアンダルシアのいくつかの地域の再入植の権限が与えられた。

以上のように，この騎士団はサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼者の保護を目的の一つとして誕生しながら，現実には，主として回教徒と戦うことを目的とした軍団であった。その証拠にイベリア半島から回教徒の脅威が去るとこの騎士団も初期の性格を失っていき，15世紀に入ると内部分裂をおこした。カトリック両王は騎士団長位を王室に接収，1523年教皇ハドリアヌス６世によって認められた。この時期より，多くの特権と収入をもちながらも衰退しはじめた。19世紀の永代財産解放令 desamortizaciõn と中央集権傾向により単なる名誉的貴族集団に堕してしまった。

7

私たちがサンティアゴへの道を眺めるとき忘れることのできないもう一つの面は，文化の流通経路としての役割である。

サンティアゴ・デ・コンポステーラへ巡礼の旅をつづける人波のふえて

いく11世紀からその具体的な結果が現われてくる。そのひとつはロマネスク様式 estilo románico と呼ばれる建築様式であり，その様式で建造された教会・修道院が巡礼路にそって姿を見せていった。イタリア・フランスから流れてきたこの様式はアラゴン，カタルーニャに入り，ついで巡礼路を通じてカスティーリャ，レオンへとひろまっていった。

それまでに半島にあった西ゴート系の教会より大規模になる。平面図はラテン十字と呼ばれる形をしており柱と枝の交差するところの上部は半円形の円屋根 bóveda でその周囲は窓におおわれていて，教会内に光を投げ下ろしている。柱にあたる部分は三つの部分に分かれ，中央は身廊 nave central, 両側は側廊 naves laterales となる。枝の部分が翼廊 naves de crucero となる。柱と枝の交差点の奥にある祭壇に向かって身廊にひざまづいた人びとは神に祈る。この様式で一番古いものはハカのカテドラルで，レオンのサン・イシドロ教会，サンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルとつづく。これらロマネスク様式の教会建築の代表作は11世紀から12世紀初頭にかけてのものである。サンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルは小川国夫も指摘しているようにバロックの大伽藍としての姿をみせている。[8] レオンのサン・イシドロ教会についても同じことが言える。というのはゴチック様式の特徴であるレタブロ画やステンドグラスが礼拝堂の一画を占めているからである。教会は人が神と語り合う場所である。人が神に心を向ける限りは教会は人とともに生きつづける。そして時代が経過するにつれて修理が行なわれ，その度に新しい様式が部分的に入り込んでいく。サンティアゴのカテドラルはその典型である。ゴチックの要素もバロックの要素も今ではもっている。しかしその芯になっているのはロマネスク様式である。

このロマネスク様式の教会で彫刻家や画家たちはもっぱら聖人の生涯や聖書の一節をテーマにして作品を作った。そうした画面の中心にパントクラートル pantocrátor と呼ばれる全能の神がすえられるのが特徴だ。レオンのサン・イシドロ教会のパンテオンのフレスコ画もその例にもれない。キリストの誕生から宣教，受難，復活と福音書の世界を辿ることができるが，4福音書作者にとりまかれたパントクラートルで終結する。

教会入口上のティンパノ（タンパン）tímpano の彫像群中に，柱に，あるいはサン・イシドロ教会のように屋根と同じ高さに聖ヤコブが姿を見せ

るときがある。サン・イシドロ教会では剣をかざした馬上の聖ヤコブである。しかし，別のヤコブ像がある。プエンテ・ラ・レイナのサンティアゴ教会のような新約聖書をもった使徒としての聖ヤコブ，あるいはフロミスタのサン・マルティン教会のような肩マントを着け錫杖をもつ巡礼者としての聖ヤコブである。

8

7月25日は現在もイスパニアの守護聖人である聖ヤコブの祝日として国の祭日に指定されている。そうした形ですべてのイスパニア人にその名を想い出される聖ヤコブは武人としてのヤコブだろうか。巡礼者としての，あるいは使徒としてのヤコブだろうか。私はこの小文をまとめていく間に，イスパニア人の間に生きつづけてきた聖ヤコブ像は国土回復運動時代にイスパニアのキリスト教徒たちをひきずっていった武人としてのヤコブだったのではないかと思う。しかし一方，聖ヤコブがイベリア半島に果たしてキリスト教を伝えたかどうか解らないと言われながらも，聖ヤコブの伝道を信じ，それ故パレスチナで殉教した彼の遺骸を弟子たちがイスパニアの西北端の地に運んだということを信じた人びとにとっては，聖ヤコブはやはり使徒としてのヤコブであり，巡礼者としてのヤコブであり，自分たちの地に福音を伝えてくれた最初の人であったのではないだろうか，とも思う。

それはともあれ，伝説が多くの人びとを動かし，歴史に大きな足跡を残したことだけは確かである。

註

1．Jean Descola ：Historia de la España cristiana, pág. 21
2．ピラール Pilar という女性名はここから来たといわれる。
3．小川国夫「ヨーロッパ古寺巡礼」146頁に「サンチャゴ・デ・コンポステラの教会のような，くすんだオレンジ色の固い石がどこにも組み合っている。パドロンもそんな町だった。ウラという川のほとりにあり，大昔イリア・フラビアと称ばれ，聖ヤコブの上陸地点だとされている」とある。
4．約4キロメートル。1ミーリャは約4分の1レグア。
5．小川国夫：前出書 143頁に「……この3体の骸骨は1世紀からここにあったが，1700年から1720年にわたって英国人の侵略があった時，司教が秘密の場

所にかくしてしまったとされていた。」とある。

6．註3.参照。

7．José María Iribarren ：El porque de los dichos, Aguilar, Madrid, 1962 págs. 300-301 では“Santiago y cierra España.”の形は誤りで，“¡ Santiago, y cierra, España!”でなければいけないとされている。Santiago は回教徒あるいはその他の信仰上の敵を攻撃する前の守護聖人への祈念。cierra は攻撃を意味する cerrar の命令形。

8．小川国夫：前出書 141 頁。

参考文献

Rafael Altamira y Crevea: Historia de España y de la civilización española, Tomo 1, 4a ed., Sucesores de Juan Gili, Barcelona, 1928

Jean Descola: Historia de la España cristiana, Aguilar, Madrid, 1954

Antonio Viñayo: La colegiata de San Isidoro-León, Everest, León, 1974

El Camino de Santiago, Publicaciones del Ministerio de Información y Turismo, 1971

Diccionario de Historia de España, 2a ed., Revista de Occidente, Madrid, 1969

Enciclopedia de la cultura española, Editora Nacional, Madrid, 1963

José Ramón Paniagua: Vocabulario básico de arquitectura, Cátedra, Madrid, 1978

小川国夫：ヨーロッパ古寺巡礼　パリからサンチャゴまで，（カラー新書），白水社，1976

クランシャン著　川村・新倉共訳：騎士道（文庫クセジュ）白水社，1963

橋口倫介：十字軍，岩波新書，1974

ルイ・ブレイエ著　辻　佐保子訳：ロマネスク美術，5版　美術出版社，1976